

## 第3回 わかりやすい洪水・濁水の表現検討会 議事要旨（案）

日 時；平成15年11月10日（月）13:30～15:30

場 所；国土交通省会議室（中央合同庁舎三号館1階 A 会議室）

（○：各委員、●：河川局）

- 「堤防の上から何m」という表現があるが、無堤部ではよいが有堤部では余裕高の整理も必要である。さらに、今の水位の上昇スピードでいくと、いつ頃天端までくるのかという情報を提供する方が親切ではないか。また、ハザードマップとP17の図面の違いは。
- 「堤防の上から何m」等の言葉の厳密的な使い方については、これから十分検討していく。主旨は、高さの基準として堤防や橋梁の桁下を使用して、住民に分かりやすく伝えたいということ。また、水位が上昇するのかどうかは伝えることとしているが、そのことがどのような意味を持つかをきちんと伝えていきたい。

P17の図面は、可能性の最大値という意味ではハザードマップと同じであるが、ここでは越流氾濫を前提に図面を書いている。
- 「堤防の上から何m」という表現と、危険水位が同時に出てくると、川が上昇しているのか、下降しているのか分からないのでどちらかにすべきではないか。また、Cランク、Dランク等という表現と、雨の情報は両方提供しても良いのでは。地震で言えば、マグニチュードに対応するのが雨で、震度に対応するのが浸水のランクであり両方いると思う。
- 雨量の情報も提供していくこととなると考えている。
- 中小河川は、情報を出す前に溢れている川もあるので、上流である程度雨が降ったら、すぐに情報を出す必要があるのではないか。
- 普段提供する情報の中で、急に溢れる可能性があるという特徴を出しておく。
- 中小河川の特徴や周辺の資本集積に応じて、きめ細かく情報の提供をするべきではないか。
- 中小河川という分け方でよいかどうか。中小河川といっても、やや大きい中流から下流域では大分違うのではないか。
- どこまでできるか分からないが整理をしていきたい。

- 基準点以外も含めて情報を出していくことに賛成であるが、橋のように街づくりにも使える場所を基準地点に見直したらどうか。
- データの蓄積がしっかりできている基準点でなくても、河川巡視などのデータを使い、「あの辺では水位がこれぐらいまできている」との情報を提供できるのではないかと考えている。
- P18の案一1、案一2のどちらかに決めるのか。
- 案一2は地震の震度階級の解説表と同じように、同じ階級でも古い家では壊れることがあるかもしれないなどの幅をもった情報で伝えるという方法である。例えば、「床下浸水がかなりのところで出ているかもしれないBランク」という言い方である。ただ、案一2のように表現すると一般に知られていないので、ランクを分けるにしても状況説明が必要となる。
- 案一1の方が分かりやすい。案一1を基本にして、それにA、B、Cランクをつける。その後定着してきたら、A、B、Cランクだけでも良いのではないか。
- 内水なら良いが、地盤の勾配が急で地面を水が走るようなところは浸水深だけの表現でよいのか。
- 整備指標としてとらえたときは、大きくとらえればよいのではないかという観点からこのような表現としている。加えて、実際の緊急時の話として、この辺は流れが早いのでという情報を追加して提供するという考えである。地形の要件のうち、一番ひびくのは、「深さ」であり、「勾配」を含めてうまく表現できる案がにわかに思いつかない。
- 水のダイナミックな動きとして、99年の福岡水害では自転車やバイクが流れたが、それを表現できる指標ができればよいけれども。
- 大きくゾーニングをして、「急峻」と「平地」に分けておいて、ABCランクをつける方法はあると思うが、できれば余り細かくなならないことも含めて検討していきたい。
- P17の整備指標の図面、表を説明してほしい。
- どれだけ河川の整備がなされれば、どういう効果があるかという中身を数量的に示すとこのようになる。これまでの整備指標が理解しにくいのは、住民の行動とか被害というものを踏まえたものとなっておらず、アウトカム的になっていなかったからである。そこで、日頃使っているものが指標の基礎になっていると住民に理解されるの

ではという主旨である。

- 今までの整備指標は堤防などの河川の器の議論をしてきた。しかし、P17でいう整備指標は氾濫したときの話であるが、氾濫は堤防が完成していても起こりうるがどう考えるのか。
- 一見器ができてはいるけれども、整備途上であると説明される方が住民には理解しにくいかもしれない。堤防などが中途半端にできている場合に、どう評価していくかというのは技術的課題である。
- 整備指標の表現手法については、本日の意見を踏まえ次回事務局から提案する。
- 大河川に流入してくる支川で沢山人口が張りついているようなところも、P5の中小河川の表で情報提供していけるのか。
- 住民からすると、大河川に関する情報提供と中小河川に関する情報提供の両方が必要である。東海豪雨の際にも、庄内川に関する河川情報で避難したら、新川の方が氾濫したということもあり、両方から情報を出すことが必要である。
- 表に、内水をイメージするものも入れた方がよいのではないか。
- 特定都市河川浸水被害対策法もできた。流域の小さい水路で内水氾濫が起こるので、貯留施設でどの程度効果が出ているのか、データを蓄積していく必要がある。そのためには財源的に厳しい中、貯留施設等を造るというハードルを乗り越える必要がある。
- 樋門が閉まり、水を吐くことができなくなっからの内水氾濫が多い。外水位が堤内地盤より高くなったので樋門が閉まりますという情報と、その後は、内水域に降った雨と内水位の関係で情報提供ができないかと考えている。そのためには、レーダ雨量でローカルな雨を精度良くとらえて、伝えていくかが大切である。
- 住民には内水も外水もなく、ともに水害である。情報文もなるべく「データ」だけではなく、「だから」ということを最後にきちんと提供してほしい。P8以降の具体的例も、「氾濫の恐れがあります」が結論にならないといけない。段階・地域で整理してあるが、住民がほしいのは、避難が必要な浸水の発生が予想されてからの情報である。
- 過去に防災に関する住民のニーズ調査をした際に、路面が浸水し、日常の活動に支障が出る段階の情報もほしいという要望があった。防災情報提供センターの整備の一環として河川局、道路局、気象庁の情報を重ね合わせて、路面浸水の段階から提供していけないかと考えている。

- 基準点などの語句の説明が必要である。
- P 4、5に平常時に出すべき情報を整理しているが、語句等も情報提供していきたい。
- 地域毎にハザードマップを出している市町村があるが、この地域ではここが切れたら大変とか、こっちが切れたらたいして被害が出ないと事前に提供できればよいが。
- 重要水防箇所の情報は水防団等には提供しているが、住民にも提供していきたい。また、ポテンシャルマップでは、一般論の話としてはできるが、優劣をつけるような話はしづらい面がある。
- 地域の過去の災害時のエピソードがあると、住民には分かりやすい。
- 平常時のデータの整理としては大切であるので、そのようにしていきたい。緊急時にも、そのような観点が入っていれば理解が進むと考えるので検討してみたい。
- 自分の命は自分で守ることが防災の基本である。そのためには、行政は情報を公開することが大前提である。提供にあたっては、わかりやすく、誤解のないようにすることが大切である。
- 整備指標のイメージ図は、整備の手順も含めて住民にかなり説明していかないと、住民はどうして自分のところがこのようになるのかと思うのではないか。
- そのようにしていかないと住民の理解も進まないと考える。川の管理から流域の管理をしていくのであれば、精度などを踏まえ住民に誤解を与えないような使い方をしていくことが必要であると考えます。
- 欠席の委員にも資料を渡し、意見を聞いてほしい。

以 上